教心寺寺報　　サーサナとはパーリ語で「教え」の意味です

サーサナ

第53号　仏暦2564（西暦2021）年9月7日

生命のつながり

一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり

親鸞聖人の語録である『歎異抄』第5条からの引用です。現代語訳すれば、「命あるものはすべてみな、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄妹・姉妹であったのです」となります。

この前後には、「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たすけそうろうべきなり」とあります。

「有情」とは、インドの言葉で「サットヴァ」の漢語訳で、「衆生」とも訳されます。感覚を有する生き物、という意味ですから、厳密には植物や原生動物は含まれないのですが、日本では事実上すべての生物＝生命体と理解されるようになりました。ですから、人間だけではなく、ひろく生物一般を有情として、私自身となんらかのつながりを持つものとして尊ぶのが仏教の精神です。

なんらかのつながり、というのは、いくつかの意味があります。一つは輪廻転生（生まれ変わり）という考え方から、すべての生命は、無限の過去から無限の未来という時間の中で、いつかどこかで接点があった、またはあるであろう、という発想になります。これを端的に表現したのが、奈良時代の僧・行基菩薩の歌です。

「山鳥のほろほろと鳴く声きけば　父かとぞおもふ母かとぞおもふ」

輪廻転生説によれば、生き物が次に生まれ変わる時、生前の行為によって高等生物にもなるし下等生物にもなります。この私も生前は犬だったかもしれないし、死後にはクラゲになるかもしれない、というわけです。山鳥の鳴く声を

聞いて、「ああ、あれは我が父母の生まれかわった姿かもしれない」と感じた行基の感受性に、いかにも、と思わされるのではないでしょうか。親鸞聖人の掲出の語も、おそらくはこの歌が念頭にあったと思われます。

ただ、輪廻転生説がほんとうの仏説といえるかどうかには、疑問があります。私自身は、これを仏説とは思いません。仏教の基本教説である「無我」とは、「死後にも残るような精神的実体、いわゆる霊魂のようなものはどこにも認めることができない」ということですから、生まれ変わる主体そのものが欠けているからです。

しかし、生まれ変わりはないにしても、科学的な知見である進化論や、細胞中のDNAの存在は、すべての生命体が太古の昔からつながっていることを明らかにしました。現生人類であるサピエンスはおよそ20万年前にアフリカで誕生し、その後さまざまな人種・民族に分化して世界各地に散らばっていきました。すべての人間はその意味で共通の祖先を持っています。人類のみならず、すべての生物が共通の祖先を持ち、膨大な時間を経ながら進化・分化していきました。これが科学的な意味での「生命のつながり」です。

生命系統樹

（余談ながら。「ヒトはサルから進化した」という言い方は間違いです。正しくは、「ヒトとサルは共通の祖先を持っている」と言うべきです。動物園のサルはいつまでたってもヒトになることはありません。ヒトとサルは兄弟の間柄で、親子の間柄ではありません。）

仏教の開祖である釈尊は、もちろん進化論もDNAも知りませんでした。仏教がいう「命のつながり」とは、輪廻転生でもなければ生命科学の知見でもなく、「縁起の理」という意味で言われる事柄です。この私が生きているということは、祖先があってこそ可能であった、これは誰にでも分かりやすいことでしょう。これは歴史的時間的な縁起です。と同時に、この私が生きているということは、今現在地球の裏側の農場で穀物を栽培し収穫している農民、工場で組立製造に携わっている労働者、名前も知らない彼らすべてのおかげをこうむっているという事実、これは共時な縁起ですが、そのことに気づくことが生命の尊重になり、共感になり、慈悲になり、他者への温かな眼差しとなります。ストレスの多い現代、ともすれば他者に攻撃的になりがちですが、この事実にあらためて思いを馳せることが大切と思います。

法要行事のご案内

各法要・行事に必要な勤行本は、お持ちでない場合は当寺より進呈または貸与いたします。念珠は必ずご持参ください。また肩衣の着用を推奨します。肩衣とは浄土真宗の仏事における正装で、本山また当寺でも授与することができます

九月　秋彼岸会

彼岸とは、覚りの世界＝涅槃のことです。これに対して、私たちが暮らす現実世界を此岸といい、此岸から彼岸に渡るのが「波羅蜜（はらみつ）」です。

❖日　時　　9月23日（木）午後2時～4時
❖内　容　　勤行（観無量寿経訓読、正信偈）、法話
❖持ち物　　勤行本『真宗法要聖典』、念珠
❖法　話　　当寺住職
❖記念品　　朱蝋

十月　報恩講（ほうおんこう）

報恩講とは、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人（1173-1262）の御命日にあたり、宗祖への報恩謝徳をあらわす法要です。浄土真宗では最も重要な法要で、「お仏事」といえば報恩講のことをいいます。

❖日　時　　10月29日（金）午後1時～3時
❖内　容　　勤行（文類偈・念仏讃・回向）、法話
❖持ち物　　念珠、勤行本『報恩講勤行テキスト』、
❖法　話　　前田和丸師（一心寺住職）
❖記念品　　法語絵はがき、他

今年は午後のみの法座です。御斎はありません。

オンライン参拝について

コロナウイルスに対するワクチン接種は進んでいるとはいえ、感染の可能性がゼロとはいえませんので、参拝にあたっては不織布マスク着用をお願いします。また、本堂での参拝をためらっておられる方にはオンライン参拝ができるようにいたします。希望される場合、前日までにお申し込み下さい。Zoomアプリを使用します。

帰敬式受式おめでとうございます

6月28日、下記の2名が、当寺第12回帰敬式を受式され、法名授与されました。今後とも、仏法聴聞・仏道精進されますことを念願いたします。

釋教實　釋尼和敬

歎異抄について

本号の冒頭に、『歎異抄』からの一節を引用しました。『歎異抄』は、明治以来、日本人に最も愛読されてきた宗教書です。ドイツの哲学者のハイデッガーは次のように評しています。

今日、英訳を通じてはじめて東洋の聖者親鸞の『歎異抄』を読んだ。「弥陀の五劫思惟の願を案ずるにひとえに親鸞一人がためなりけり」（歎異抄後序）とは、何んと透徹した態度だろう。もし十年前にこんな素晴らしい聖者が東洋にあったことを知ったら、自分はギリシャ・ラテン語の勉強もしなかった。日本語を学び聖者の話を聞いて、世界中に広めることを生きがいにしたであろう。(中略）日本の人達は何をしているのだろう。日本は戦いに敗けて、今後は文化国家として、世界文化に貢献するといっているが、私をして云わしむれば、立派な建物も美術品もいらない。なんにも要らないから聖人のみ教えの匂いのある人間になって欲しい。（中略）そのとき世界の平和の問題に対する見通しがはじめてつく。二十一世紀文明の基礎が置かれる。

(以上引用『中外日報』1963年8月6日)

参考書『新版　歎異抄　現代語訳付き』（千葉乗隆訳、角川ソフィア文庫）
『歎異抄』（阿満利麿訳注、ちくま学芸文庫）

真宗大谷派　教心寺（名古屋教区第３０組）
編集発行人　釋眞弋　（山口眞一）
468-0026　名古屋市天白区土原3丁目205番地
電話：801-1381　　ＦＡＸ：807-1198　　電子メール：kyosin@nagoya30.net
URL　http://www.nagoya30.net/temple/kyosin/